

山林火災を繰り返さないために私たちにできること。

第1回足利山林火災防止シンポジウムで考える

開倫塾

塾長 林 明夫

Q 1 : 2021 年 2 月の足利山林火災から 4 年が経過、山林火災防止シンポジウムを開催したそうですね。足利山林火災はどのようなものでしたか。

A : (1) 4 年ほど前の、2021 年 2 月 21 日の 15 時頃、足利市西宮町の林野で発生した山林火災は、3 月 15 日の鎮火まで、167 ヘクタールを焼失。この時期は、北側にある赤城山から吹き付ける赤城おろしと呼ばれる季節風が強い北風のため、住宅地のすぐ近くまで火が迫る勢いでした。

(2) 地元足利市のみならず、佐野市・桐生市・館林市・太田市・宇都宮市・東京都の消防本部や、防災ヘリとして、自衛隊や、栃木県・宮城県・埼玉県・茨城県・山梨県・富山県・東京都・横浜市などが出動、空からの消火活動にご尽力いただきました。

○住宅街のすぐ近くまで山林火災が迫る様子や、消防士・ヘリコプターによる懸命の消火の様子は、連日、TV や新聞で報道され、多くの関心呼びました。

(3) 火災からおおよそ 1 か月後の 3 月 30 日、足利市は山火事の出火原因が「タバコと推定される」と発表。出火場所とみられる付近に、複数のたばこの吸い殻が落ちていたため、この推定に至りました。この事件を受け、足利市では、山林火災防止のために、全国初の、「美しい山林を火災から守る条例」を制定しました。

(4) この足利市条例は、「喫煙（加熱式、電子タバコを含む）」「たき火」「煙火（のろし、花火など）」「裸火（ライター、ストーブ、コンロなど炎が露出するのもの）」を禁止、モラル向上を目的とするもので、罰則は設けられていません。

(5) 山林火災の影響をもろに受けたのが、日本三大毘沙門天足利大岩山最勝寺です（日本三大毘沙門天とは、京都の鞍馬山と、奈良の信貴山、それに、この足利の大岩山です。奈良時代に行基が開山）。この最勝寺のすぐ近くまで火が迫ったため、地域の住民の皆様がご本尊など重要な仏像を守るため持ち出した際に、一部損壊に至りました。現在、重要な文化財を守り修復、後世に遺すために、最勝寺御本尊毘沙門天修復委員会を組織し、資金造成活動を展開中です。

Q 2 : どのような内容のシンポジウムでしたか。

A : (1) 火災後 3 年を経過し、少しずつ落ち着きを取り戻したので、2024 年春から山林火災の再発を防止するために、市民ができることは何かを話し合っていた、先ほどの最勝寺御本尊毘沙門天修復委員会のメンバーが中心となり、シンポジウム実行委員会を発足。半年間の慎重な準備会合（毎月 1 回）、足利市や林野庁、消防団、山岳会、里山の会などのご協力をいただき、開催に至りました。（委員会の会合は、大会経費削減のため、開倫塾本部

校の教室をお使いいただき、協力させていただきました)

(2)2024年11月10日(日)午後2時から5時までの3時間、足利市民プラザで、180名御参加のシンポジウムを開催しました。第一部は、消火活動にご尽力いただいた足利消防団長、各消防分団、自治会防災会を表彰。市民として、感謝の意を表させていただきました。

(3)第二部、第三部は、講演会とパネルディスカッション。早川尚秀・足利市長様(地域行政の視点から)、門脇裕樹・林野庁研究指導課森林保護対策室長様(林野対策の視点から)、渡邊雄二・日本山岳会栃木県支部長様(ハイカー団体の視点から)、増田恵夫・足利山里の会長(山林火災後の山林保全の視点から)、大出芳夫・足利河南消防署長(消火活動の視点から)が講師としてご講演し、全員が参加し、パネルディスカッションのパネラーとして、極めて熱心な議論が展開されました。

(4)最後に、「足利市山林火災防止シンポジウム大会宣言」を、参加者全員で唱和、採択。「私たち、市民一人一人が、自然を守り、ともに生きる意識を高めることで、未来の災害を防ぐことができると信じています。山火事の原因の多くが人の不注意であることを鑑み、私たちは以下の行動を約束します」。

(5)その内容は、

- ①「正しい知識の習得と実践」
 - ②「地域の自然保護活動への参加」
 - ③「防災意識の啓発」
 - ④「迅速な対応」
- の4項目です。

Q3：学習塾、予備校、私立学校の経営幹部の皆様にお伝えしたいことは何ですか。

A：(1)山火事防止に向けて、今一番必要なのは、防火意識・規範意識の醸成です。山に入ったら、足利市の条例や、大会宣言をご参考に「火に注意」を「ごみの持ち帰り」と同様、折に触れお教えいただきたく存じます。

(2)月、1～2回、下草狩りや間伐、山林整備を行う、「森林ボランティア」が極端に不足しているそうです。お元気な先生は、森林ボランティアにご参加を。

(3)このような市民レベルのシンポジウムの開催では、準備会合が何回か必要ですので、学習塾の教室を、空いている時間にお使いいただき、経費をかけない大会運営にご協力させていただくことも、学習塾としての社会貢献活動になるのではと考えます。

○大会のチラシは、塾生を通じて、市内の保護者様に配布させていただきましたので、多少は啓蒙活動になったのではと考えます。

Q4：最後に一言どうぞ。

A：僭越ではありますが、今月も先生方がお読みになれば必ずお役に立つ作品を何冊かご紹介させていただきます。

(1)一冊目は、デンマーク在住で、国際競争力世界一のデンマークから日本の発展のために最先端の情報を発信し続ける、針貝有佳著「デンマーク人はなぜ4時に帰っても成果を出せるのか」PHPビジネス新書、PHP研究所、2023年11月29日刊です。ヒント満載の、元

気が出る一冊です。

(2)二冊目は、ドイツから 30 年以上、日本の発展のために、最先端の情報を発信し続けている、元 NHK 記者、熊谷徹著「ドイツはなぜ日本を抜き『世界 3 位』になれたのか」ワニブックス、2024 年 9 月 10 日刊です。

○第一冊目と、第二冊目を、重ね読みして、では日本は何をどうすればよいのかを考え、明るく、楽しく行動いたしましょう。

(3)三冊目は、日本企業は世間で言われるよりもはるかに強いと、明確に主張する、ウリケ・シェーデ著「シン・日本の経営、悲観バイアスを排す」日経プレミアシリーズ、日本経済新聞出版、2024 年 3 月 8 日刊です。日本式経営のよい面を探し求め、それを、自社でどんどん引き伸ばすのに、だれの遠慮もありません。塾生の皆様にも、日本の会社の魅力をどんどんお伝えし、未来に希望を持たせてください。

(4)四冊目は、一度でもスペインに行ったことのある先生、これからスペインに行きたいと思っているすべての先生のための「待望の一冊」。黒田祐我著「レコンキスタ、『スペイン』を生んだ中世 800 年の戦争と平和」中公新書、2024 年 9 月 28 日刊です。岩波版「世界史年表」と、高校生用の「世界歴史地図帳」を参照しながら、ぜひ、ゆっくりと、行きつ戻りつ、腰を落ち着けて、ご一読ください。スペイン理解に不可欠の「レコンキスタ」が、この一冊で、一気に深まり、身近に感じられます。

(5)五冊目は、加地伸行著「論語」講談社学術文庫、講談社、2009 年 9 月 10 日刊です。「論語」の 499 章を、一気に読み込むには、絶好の著。以前、論語の 499 章を通読なさったことのある先生方も、全章を再読なさってください。「君子」とは「教養人」という観点から、「論語」の全章を読み直すと、別世界が展開します。「古典の奥深さ」を実感させる好著です。

(6)六冊目は、国境を越えた MandA (Cross Border MandA) の第一人者、毛利正人先生の最新著、「公的組織への実効的内部統制の導入と展開、形骸化から脱するためのフレームワークと実践知」白桃書房、2024 年 10 月 16 日刊です。「公的組織」を「中小・中堅企業」と読み直せば、今、最も必要な、「学習塾」「予備校」「私立学校」の「ガバナンス」「内部統制」に直接お役に立つと、確信します。

(7)七冊目は、土地に根を下ろす移住の未来とは何かを追求する、フェリクス・マークォート著「ニューノマド、新時代の生き方」早川書房、2024 年 8 月 21 日刊です。厚生労働省の国立人口問題研究所の人口推計には、1 割の外国出身者が含まれています。そうであるならば、「ニューノマド」と真剣に対峙することが、すべての場面で求められます。

(8)八冊目は、砂原浩太郎著「浅草寺子屋よろず暦」角川春樹事務所、2024 年 9 月 28 日刊です。浅草の寺子屋を舞台に師弟、親子、兄弟、幼馴染が登場する、傑作時代長編小説です。学習塾の原点は、江戸の寺子屋。先生方の、年末年始の読書として、最適です。大いに楽しみましょう。

○新聞を含む、幅広い読書が「地域における知識専門職」である、学習塾・予備校・私立学校の先生方の「資質向上」の原点です。先生方が、新聞を含め、日ごろから読書に慣れ親しんではじめて、塾生や保護者、地域社会の皆様も、新聞を含め、読書に励むようになりまします。

— 2024 年 11 月 12 日記 —